

『三迦会』～能海、子安、白山のこと～

タイトル	『三迦会』～能海、子安、白山のこと～
著者名	隅田正三
雑誌名	能海寛研究会機関誌『石峰』
号	第 17 号
ページ	48
発行年	2012.3.15
E-mail	Sekihou@hazaway.com(能海寛研究会)

ISSN 1883-4183



中国僧姿の能海寛

能海 寛 略歴

能海寛 法名法流。石峰と号す。明治元年5月18日島根県浜田市金城町長田（当時は東谷村）浄蓮寺に生まれる。12歳で得度し、慶応義塾と哲学館に学ぶ。恩師南條文雄師の意思を継ぎチベット探検の論文『世界に於ける佛教徒』を発表すると共に語学の研究と山岳登山による体力の練磨をなす。郷里にあつては地方史を編纂して和歌を詠み、益田沖の高島にて寺小屋を開設する。哲学者、探検家、宗教家として釈迦真伝の大藏經の經典を求め英訳經典世に出ず目的で当時領国中であつたチベットへ求道のため身を挺し仏教巡礼探検を実践した功績は偉大で有言実行と用意周到さは後世に幾多の教訓を残す。その苦難の34年の生涯に「般若心經」西藏文直訳（梵・藏・漢・英）など四巻が著書として永遠に伝う。

「三伽会」～能海、子安、白山のこと～

能海寛研究会会員 隅田正三

恩師南條文雄氏を通じて、能海寛を巡る親友3名の関係について概略を記し、参考に供したい。

岐阜県安八郡澤渡村淨勝寺	斐川	子安善義
東京市芝区三田北寺町西蓮寺	沛南	白山謙致
島根県石見国那賀郡波佐村	石峰	能海 寛

能海は、京都で遊学中にE・C・S（「英文会」）を主宰し、週刊『New Buddhist』を英文で発刊していた。この「新仏教徒」運動中に仏教を英文に翻訳するときに、梵意が判らないと不都合が生じることに気が付き、梵学にめざめたのが、明治21年10月頃であった。その後、2年間梵学の研究に入る。能海の梵学のスタートは明治21年からである。

能海は、広島進徳教校時代に広島別院の桑門至道氏宅へ寄留していた関係で子息の典氏と親友関係となり、東京時代を通して互いに交流が続いた。このような関係で、明治23年慶応義塾に在学中、6月上旬に桑門至道の子息桑門典と三田町西蓮寺白山宅に下宿中、其の頃、子安と白山は同級生で、白山宅において三人が知り合ったのがきっかけである。明治23年10月より、子安は南條博士の下で食客となり、梵学を研究していた。24年1月から能海は、哲学館在学中に本郷町から、白山は三田町から南條博士の宅へ通いマクドネルの文典や大経の梵本を数年掛けて共に読み「大経」読了時に記念の写真を撮り、能海の帰郷に合わせて、三枚にそれぞれが自著して分け合った。この時が、明治26年7月7日である。

子安は、27年1月に帰寺したが、時々、上京して、南條博士の宅に寄留して梵語を学んでいた。子安の父親が他界でしたことで、28年末に子安は帰山した。子安の後任として能海を南條博士に推薦していた。

能海は、南條博士から「梵学専門生に相成り十分共に研究に成候」とチベット派遣決定までは、寄留して梵学研究をするように勧め、「本山から受け取る手当から10円渡し、その内3円が賄料として食料費引き去り7円宛はお渡しして……」の誘いを受けて29年3月に再上京して、南條博士宅に寄留して、梵語の外に中国語の勉強もしていた。シュラギントワイト氏の西藏文典も研究していた。上京後も、「三伽会」と称して、能海、白山、子安の三人は、南條師の下で大経梵文翻訳の大事業を遂行した。時おり会食をして交流を図っていた。

能海は、結婚のため明治31年4月に南條博士宅に別れを告げた。その後、子安は時折り南條博士宅に寄留していた。明治37年8月、能海静子が寛の生死の確認に南條博士宅を訪問した際に、子安が応対した。

子安曰く、能海は、「素朴にして、多くを語らぬ風でした。意志強固にして、中々の論客でした。日頃統計を好まれ、新聞等に何頃の統計表が出てあれば写し取られた。今から考えれば入蔵の支度に国家の大勢を観測された様です。」大正6年3月13日記（『能海寛遺稿』）

(2012.2.15)